

ふねづくりに使われる道具

○マイチョウノ

オノのひとつで、柄を握ってふりおろすことによって刃先が木にくいこみ、けずりとるもので、これをくり返すことによって、必要な形にするための道具であり、このようなマイチョウノの使い方を“木をはつる”という。マイチョウノ

は、柄に対して刃が直角につき、柄は手前に大きく曲がっており、材の内側をえぐったり、表面をけずったりするのに便利のように工夫されている。



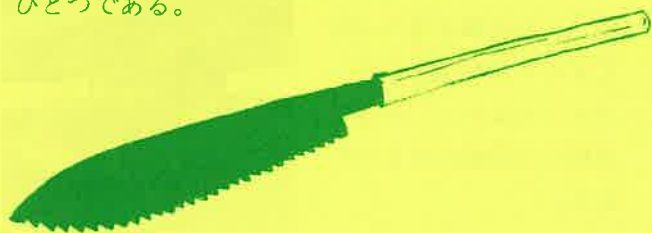
○アナアケノミ

キリクリとも呼ばれ、クギ穴をあける作業で使われる。アナアケノミは、柄のはしをツチでたたいて、刃先を木に打ちこみ、穴をあける道具で、タタキノミのなかまである。



○スリノコ

スリアワセノコとも呼ばれ、板の合せ目を整えて合せ目のなじみをよくするために使われるノコである。刃が一方にしかない片刃でタテびき用のノコのひとつである。



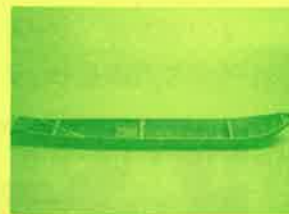
ふねづくりの歴史(川船と海船)

時代	西暦	おもなことから
飛鳥時代	630	安芸国でさかんに遣随使船、遣唐使船をつくる。
江戸時代	1619	倉橋島の船大工が藩の保護を願い出る。 広島藩が500石以上の大船建造を許す。
	1671	太田川流域が開削され、舟運が始まる。 河村瑞賢が西廻航路を開き、瀬戸内海の交通が盛んになる。
	1820 1840	倉橋島の造船が盛んになる。 広島の子品で造船が始まる。
	明治時代 1889 1890	呉に海軍工廠がおかれる。 子品港ができる。
昭和	1935	太田川の舟運が行われなくなる。

代表的な太田川の川船

○サイリ

アユをとるため船で、現在の太田川で最も多く使われている船である。船の長さが約7 m20 cm、幅が約1 mでスギの木でつくられている。船の中央にとった魚を生かしておくための水漕がつけられている。



○チャンコ

網を使って魚をとるための船で、船の長さが約6 m80cmあり、サイリより少し短かく、幅が約1 m10cmミヨシが広がって丸みをもっていて、ミヨシに立って網を打つときに体が安定し力が入りやすいよう工夫されている。



学習の手引 第6号

かわふねづくり



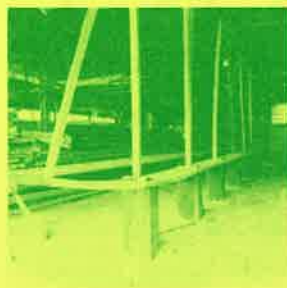
船小屋(安佐北区安佐町追崎)

広島市郷土資料館

〒734 広島市南区宇品御幸二丁目6番20号
☎(082)253-6771代

—川船のできるまで(オオブネの場合)—

① 川船づくりはスギ・ヒノキの材料の確保、板の寸法どりの作業をへて、木組みからはじまる。床にリング(船台)と呼ぶマツ材を並べて、底板となるカワラを乗せ、作業場の梁からカワラを固定させるハリツズをたてる。



1



2

② トモ(船尾)のトダテはハリツツで支えられ、底に対して約120度のかたむきをもたせている。



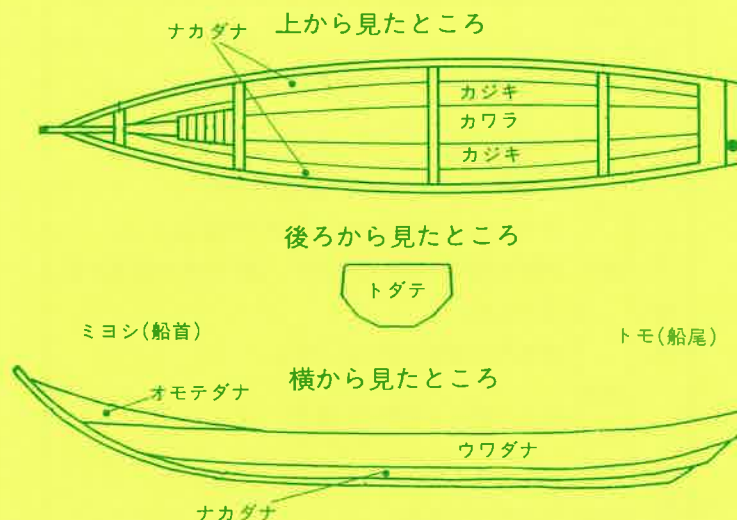
3

※ハリツツ

カンやツガ材が使われ作業場の屋根を支える梁の横木から船板を固定させるために用いる。(写真①③を参照)

③ ミヨシ(船首)は厚さ3寸(約9cm)の板のヒノキ材が使われ、下からはオモテハズ、梁からはヒカエハズで固定される。ミヨシは船の大切な部分なので特に注意して作業がすすめられる。

〔オオブネの各名称〕



舟大工が、一人前の腕を発揮できるようになるには、少なくとも5～10年かかるといわれている。本組みの工程で、水もれがないように板と板をあわせる技術はまさに名人芸といえる。

④ カワラの左右の側面板はカジキと呼ばれる。あわせ部分は、アオリといい、マイチョウノ、カンナなどで角度をもたせてけずる。



4



5

⑤ カジキにクギ穴をあける作業で、クギ穴は全体では250か所を越える。等間隔に打つための寸法どりをを行い、ノミとツチを使って穴がかけられる。

⑥ 支えとなるツツをたてながら、カジキがつけられる。板のすき間が全くないようにスリノコを入れながら合わせてゆく。

⑦ ツツを入れ、支えながら、カジキにさらにナカダナを張りつける。ナカダナのとりつけ勾配などは熟練した船大工でないとできない仕事である。

⑧ アラをとって、ナカダナのすり合わせが終わると、つぎには、イギリスと呼ばれるマンリキヤツヅを使って固定される。

⑨ カジキ・ナカダナが張られると同時に、補強のために、曲がったエビフナバリが底板に、その上に平行にナカフナバリが加えられる。



9



10

⑩ ミヨシ近くのオモテダナはガストーチであぶり重量をかけながら曲げられる。

⑪ 木の節に埋木をはめ、ミヨシにカイを使う時の支えとなる綱を巻き付けてオオブネが完成する。オオブネはかつて舟運で活躍した荷船のひとつである。



11